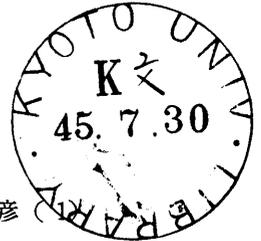


FRANCIA

NUMÉRO 10



モリエールにおける reconnaissance について
—dénouement の是非をめぐって—

山本邦彦

フローベルの初期作品における没個性

—『狂人の手記』を中心に—

佐藤和生 (13)

ブルーストにおける死の思想

鈴木祥史 (25)

アラン、人と思想

篠圭司 (37)

ルイ・アラゴンの「転換」

—シュールレアリズムの時期—

丹治恒次郎 (45)

エリートの行為と責任

—アンドレ・マルロー批判—

川久保輝興 (62)

サルトルにおける《冒険》の問題

阪上修 (70)

ロマン派詩人の語彙量—推計学的文体論

大橋寿美子 (81)

歴史的不定法に見られる動詞的性格と名詞的性格

福本直之 (88)

〔書評と紹介〕

『十八世紀における幸福の観念』

西川長夫 (100)

ROBERT MAUZI ; L'IDEE DU BONHEUR

DANS LA LITTÉRATURE ET LA PENSÉE

FRANÇAISES AU XVIII^e SIÈCLE

(ARMAND COLIN. 1960)

ペインター著「マルセル・ブルースト」

—生活と作品との裂け目に—

飯田龍天 (112)

— 京都大学フランス文学研究

京都大学附属図書館

1 9 6 6

Kyoto University Library

FRANCIA No. 1~No. 10 総目録

No. 1 (1958)

ヴィヨンの諷刺の基礎構造	山本 淳 一
パスカルにおける imagination の問題	田辺 保
スタンダール研究覚書—大革命前後	藤原 裕
「リュシアン・ルーヴェン」小論	島田 尚 一
「バルザックの小説」—セザール・ピロト—をめぐって—	田村 椒

No. 2 (1958)

「ブリタニキウス」小論	杉山 毅
ラシーヌの Conversion の性格について	尾崎 正 明
バルザック研究の方向を求めて	田村 椒
「失われた時を求めて」における作中人物の言語について	藤木 貢
ヴァレリーの詩学—言語の問題—	杉本 秀太郎
モーリヤック論—その作中人物について—	高橋 和 子
モーリス・グラモン「フランス詩句論」	
—フランス詩観賞の一つの立場—	本 田 烈

No. 3 (1959)

モンテーニュの均衡	杉山 京 介
『ドン・ガルシー・ド・ナヴァール』と『ミザントロップ』について	佐藤 保 子
パスカルにおける absence の意味	田辺 保
スタンダールの小説における喜劇的要素について	鳴岩 宗 三
モーリヤック論(続き)—その主要作中人物について—	高橋 和 子
「失われた時をもとめて」における作中人物の言語について(続き)	藤本 貢

No. 4 (1960)

いわゆるプロア詩会について	山本 淳 一
ディドロにおけるリアリズムの理論とその実際	阪本 登
ルソーにおける想像力の問題	宮ヶ谷 徳 三
スタンダールのナポレオン	西川 長 夫
メリメ作「ラ・ジャックリイ」の現代的意義について	新井 美 史
悪の華の主題と方法(一)	若 桑 毅

『ジャン・パロワ』小論	広田正敏
◀マルセル・ブルーストの文学創造について▶—ブルーストと批評—	柳谷 敏

No. 5 (1961)

悲劇『アンドロマック』の位置	福山三雄
『対話』試論—ジャン・ジャック 迫害の陰謀組織という ルソーのイメージについての考察	竹内成明
ロマン主義時代における「民衆」とスタンダールの「民衆」	西川長夫
—フェランテ・パラ論—	西川祐子
悪の華の主題と方法 (二)	若桑 毅
アナトール・フランス—その作品に表われた “Science vulgarisée”	加藤林太郎
アンドレ・ジッドにおける文学構造の二重性	浜田 明
「悪の華」研究 I—ボードレールの想像力について	工藤 睦子
Roman de la Rose に見られる二つの amour について	若杉 泰子
ルソーと演劇—「ダランベールの手紙」覚え書	宮ヶ谷 徳三

No. 6 (1962)

スタンダールの「イタリア絵画史」(1)	西川長夫
ロマン主義運動におけるスタンダールの位置	梶野吉郎
バルザックのユートピア小説について—『田舎医者』論—	西川祐子
Comédie Humaine における「愛」について	黒崎靖子
ボードレールと絶対—『深淵より叫びぬ』の◀Toi▶の意味から—	竹内成明
モーパッサンの芸術	円尾 健
チボーデの方法 「創造的批評の二・三の問題」	浜田 明
『ヴィエイユ・フランス』小論—残された人々—	広田正敏

No. 7 (1963)

「カルヴァン派の殉教者」(「カトリヌ・ド・メジンス」 第一部について)	西川祐子
マラルメにおける旅の主題—死を賭した旅立ちとその果—	三好 郁朗

〔ラクロ研究〕

ラクロ試論	西川長夫
「危険な関係」における人間像	天羽 均
「女性論」と「危険な関係」—ラクロとルソー—	松本 勳

No. 8 (1964)

17世紀の記録文学—モットヴィル夫人の「覚え書」—	赤木 富美子
ルソーの転期—「新エロイズ」のクラランと「エミール」	
第五章における幸福な生活のイメージについて—	松本 勤
「ラモーの甥」覚え書	佐々木 康之
エルヴェシウスの「人間学」の構造	西川 長夫
「危険な関係」における演劇性	佐藤 和生
「ルイ・ランベール」小論	黒崎 靖子
「人間喜劇」の「私生活場景」における「青春」の意味	西川 祐子
ベルナノスの「ウィーヌ氏」における司祭の問題	天羽 均

No. 9 (1965)

パスカルの護教論に於ける理性、そして心情	山崎 信二
「ラモーの甥」の逆説	佐藤 和生
ユゴーにおける「自然」について	大橋 寿美子
ヴィクトル・ユゴー下の詩におけるボナパルチスム	
—十九世紀ナショナルリズムと文学—	西川 長夫
ルイ・ランベール—バルザックによる知的な青年主人公の創造—	黒崎 靖子
「社会生活の病理学」と「パリ生活場景」の主題	
—「パリ生活場景論」(1)—	西川 祐子
ブルーストにおける彷徨と探求—「失われた時を求めて」	
における塔の形象をめぐって—	飯田 龍天
「芸術論集」と想像力	筏 圭司
話法不定法の歴史的考察	福本 直之

No. 10 (1966)

モリエールにおける reconnaissance について	
—dénouement の是非をめぐって—	山本 邦彦
フローベールの初期作品における没個性—『狂人の手記』を中心に—	佐藤 和生
ブルーストにおける死の思想	鈴木 祥史
アラン、人と思想	筏 圭司
ルイ・アラゴンの「転換」—シュールレアリズムの時代—	丹治 恒次郎
エリートの行為と責任—アンドレ・マルロー批判—	川久保 輝興
サルトルにおける《冒険》の問題	阪上 修
ロマン派詩人の語彙量—推計学的文体論	大橋 寿美子
歴史的な不定法に見られる動詞の性格と名詞の性格	福本 直之

〔書評と紹介〕

◀紹介>：『十八世紀における幸福の観念』

西川長夫

ROBERT MAUZI ; L'IDEE DU BONHEUR DANS LA
LITTERATURE ET LA PENSEE FRANÇAISES AU
XVIII^e SIECLE (ARMAND COLIN, 1960)

◀書評>：ペインター著「マルセル・ブルースト」

—生活と作品との裂け目に— 飯田龍天

編集後記

「フランシア」もここに第十号を発刊する運びとなりました。創刊以来十年といえ、雑誌の年令としても一つの段階を迎えたわけで、「フランシア」をここまで「育て」てこられた維持会員の諸氏、および現在御尽力をえている現会員の諸君に対して敬意を表したいと思います。また、生島先生からは十号を記念して一文を戴くことができました。

この雑誌の性格にも、期せずしてか一つの特徴が生まれてきているようで、それが今後どのように伸びてゆくかわれわれとしても期待を懐かされます。今号には、一号から十号までの掲載論文総

目録をつくり、また新しい形式として「書評と紹介」の欄をもうけて二篇をのせております。執筆者もかなり多彩となり維持会員からの原稿は四篇となりました。来号にも各研究分野からの御投稿、とくに新進気鋭の諸氏からの御投稿を編集員一同お待ちしております。なお、今回、編集委員会で規約の一部を改正して維持会員の編集委員を三名とし、新たに西川長夫氏を加えました。この紙面をかりて御報告いたします。

編集委員

〔会員〕

丹治恒次郎
山本邦彦
川久保輝興
宇佐美祥史
鈴木木
〔維持会員〕
沢田久
中川長夫
西川定夫

(丹治)

執筆者紹介

山本邦彦	大学院博士課程在学
佐藤和生	大学院博士課程修了
鈴木祥史	同志社大学 講師
篠木圭司	大学院修士課程在学
丹治恒次郎	京都大学文学部卒業
川久保輝興	大学院博士課程在学
阪上保輝	大学院博士課程在学
大橋寿美子	大学院博士課程修了
福本直之	大学院博士課程在学
西川長夫	立命館大学 講師
飯田龍天	大学院博士課程在学

FRANCIA —10—

1967. 1. 5 印刷

¥400

1967. 1. 7 発行

発行 京都大学フランス文学研究室
京都市左京区吉田本町京都大学文学部内
振替・京都 8087